



環境学 研究系長のことは

Message from
Chair, Division of Environmental Studies



徳永 朋祥 教授
環境学研究系長

環境学研究の 新たな展開に向けて

環境学研究系は、発足から20年を迎えました。また、今年度は、環境学研究系にとって大きな変化を迎える年となりました。2006年4月に本郷キャンパスから柏キャンパスに移動し、環境棟で研究を推進してきましたが、環境棟のPFI事業が昨年度で終了し、新しい施設維持の体制がこの4月から始まっています。それにあわせ、建物1階玄関西側のスペースを改修し、多くの人により有効に利用していただけるようにしました。建物に入るときに時々状況を見るのですが、様々な話し合いや打ち合わせがそのスペースを利用して行なわれており、そのような環境から新しい協働や研究が芽生えることに大いに期待したいと思っています。もう一つは、日本学術振興会の「博士課程リーディングプログラム」として2011年に設立したサステナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラム(GPSS-GLI)が7年間の事業を終え、自立して運営していくことが求められる段階に移ったということです。このような機会を積極的に活用し、今までの蓄積を基盤としつつ、新しい環境学研究の展開に向けた活動を進めることが必要であると認識しています。

このような状況の中で、環境学研究系では、教育・研究において、新たな展開に向けた活動が始まっていると感じることがあります。例えば、環境デザイン統合教育プログラムでは、デザインを「環境に働きかける行為」と広く定義し、そのテーマの一つとして、「人—社会—自然を結び関係性を豊かにしながら、社会的・生態学的弾力性を高めるための具体的な実践を、空間デザイン、社会デザインの両面から考える」ことを目指すフィールド演習を開始しています。この演習には、環境学研究系の4つの専攻の教員が参加しており、私もその1名に加えていただいているのですが、様々なバックグラウンドを持つ教員、学生、地域の方々と同じ問題について議論をし、どのように「働きかけるか」を考えていくことは、非常に刺激的な場であるということを実感しています。つまらないことかもしれませんが、「フィールドワーク」の意味する活動の違いがこんなに大きいのかと、今まで自然科学・工学的な観点からフィールドワークをしてきた人間として驚くという経験をしたことは、私の今後の研究や社会的な活動を進める上での姿勢にも影響を与えてくれたと、この演習に関わってくれているメンバーに感謝をしています。

他にも、いくつもの新しい環境学研究が始まりつつあります。例えば、環境DNA・ビッグデータ解析をキーワードに、生命科学研究系の先生方との協働が昨年度から始まっています。それ以外にも、病院内や手術室といった過酷な「環境」での人間の活動をテーマにするという新しい環境学研究、エネルギーシステム解析・まちづくり・サステナビリティ学の融合とUDCKの実践知をさらに展開する社会イノベーション研究など、その進展がとても楽しみなテーマが見出され、研究が進んでいます。

新領域創成科学研究科が掲げる「学融合」と「知の冒険」は、口で言うほど簡単なことではありませんが、その重要性和楽しさをしっかりと受け止めつつ、新たな環境学研究を展開していければよいと考えております。